

「悲しみは、次に進むためのステップ」



- 誰もいない春休みの静かな校舎に、保護者と一緒に現れたAさん。Aさんは4月から家庭の都合で別の学校に転校することになり、今日は長年間過ごした学び舎に別れを告げるために来ました。
- Aさんは担任との話が終わり、職員室で「さようなら」と話した後、何を思ったのか再び進級や卒業の飾り付けが残る教室へと歩き始めました。そして、廊下に貼ってある写真を優しく指で触りながら友達の名前を呼んだり、慣れ親しんだ全ての教室に入ってゆっくりお辞儀をしながら感謝の気持ちを伝えたりしました。時々、意味もなくスリッパを脱いだり履いたりする動作に、保護者の待つ玄関に行かなければならない気持ちと、もっと思い出の残る教室にいたい気持ちが交錯していると感じました。そんな寂しそうなAさんの後ろ姿を見ていると、「お母さんが待っているから早く帰ろう」とは言えませんでした。担任をはじめ、その場にいた職員は黙って見守ることしかできませんでした。（きっとAさんは心の中で泣いていたに違いありません）
- 悲しみや寂しさは、消し去ったり乗り越えたりするものではなく、上手に付き合っていくものだと言ったことがあります。今日の悲しみは、次に進むためのステップです。悲しみがあるから強くなれるのです。優しくなれるのです。

「Aさん、新しい学校でも自分らしく、みんなから好かれる人でいてください！」

